

# 日本の若者のライフストーリーの構築過程 におけるマスターナラティブからの逸脱

—ひきこもりに着目して—

安居 元紀

## 問題と目的

アイデンティティの統合は、Erikson (1968) の生涯発達理論における基礎的な概念の一つである。先行研究では、個人が自身の人生についての一貫したライフストーリー (以下、語り) を構築することで、時間・文脈を超えてアイデンティティ統合の感覚を得ることに着目してきた。その他にも、発達の観点から見て理論的・実証的な注目が必要な統合として、個人と文化的期待の間の統合、すなわち、個人のアイデンティティが、その人が参加する広範な文化と調和する感覚が挙げられる (McLean & Syed, 2015)。

近年、個人と文化的期待の間の統合を明らかにする手法として、マスターナラティブ (以下、MN) の枠組みが注目されている。MN とは、文化の中で広く共有されている語りの枠組みで、個人が自身の文化で、良い人生とはどのようなものかを理解するのに役立つ。他方、オルタナティブナラティブ (以下、AN) は、MN とは異なる、またはそれに反する語りの枠組みである。

MNの枠組みは、個人の語り、MN、ANの3者間の交渉プロセスを見ることに適している。例えば、個人の語りがMNと調和すると、その個人は社会に属しているという感覚を得る。一方で、個人の語りがMNから逸脱した場合、その個人はANを構築しようとする (Andrews, 2002)。ANを構築・洗練することで、社会文化的な制約を受けつつも、主体性を発揮しながら自分なりの方法でアイデンティティ統合の感覚を得ようとする。

このように、アイデンティティ研究において、MNの枠組みは重要な視点であるにもかかわらず、日本において先行研究は存在しない。MNの枠組みを用いて日本人のアイデンティティ発達

と文化的な期待の間に起こる交渉プロセスを明らかにする必要がある。しかし、個人の語り、MN、ANの3者間の交渉のプロセスは多様であり、本研究においてその全てを見ることは難しい。そこで本研究では、こうした交渉のプロセスの枠組みの端緒を掴むため、MNからの逸脱という現象に限定して着目する。

MNからの逸脱を取り上げることは、日本における個人の語り、MN、ANの3者間の交渉のプロセスという大きな枠組みを理解する端緒となる。多くの人が文化的な期待に無意識に適合しているのに対し (McLean & Syed, 2015)、MNから逸脱する人は、逸脱に伴う社会的制裁もあって、MNをより意識するからである (McLean, Shucard & Syed, 2015)。そのため、MNから逸脱した人においては、個人の語り、MN、ANの3者間の交渉が積極的に行われており、そのプロセスを効率的に理解することが可能となる (McLean et al., 2017)。

本研究では、MNから逸脱している対象として、日本の若者の「ひきこもり」を取り上げる。ひきこもりは、社会との接触を断ち、孤立する現象とその状態にある人を指す (鈴木, 2014)。

先行研究において、日本の若者のひきこもりの発症には、日本社会や文化との関連が示唆されている。日本の社会は、若者に対して、学生や労働者のような社会的役割を担うことを期待する。しかし、それに対してひきこもりは社会参加を拒否し、家庭に留まることで抵抗する (古橋, 2014)。このように日本の若者のひきこもりと社会の二者間には相互的な交渉プロセスが存在している可能性が高く、MNの枠組みの研究対象として適当である。

以上を踏まえ、本研究ではひきこもり者がMN

からの逸脱を経験しているか否か、また自身が逸脱している MN を詳細に理解し、それに対する AN を精緻化して自己の語りを構築しているかどうかを検討する。本研究の仮説として、ひきこもり者はその他の者と比較して、MN からの逸脱を経験しやすく (仮説 1)、MN の内容を精緻化し (仮説 2)、AN の内容を精緻化している (仮説 3) と予測した。また、ひきこもり者の逸脱している MN の内容について探索的な検討を行う。

## 方法

### 対象者と手続き

第一に、対象者がひきこもり者か否か判定するため、日本の 19-27 歳の大学生・大学院生 106 名 ( $M = 19.94$ , 女性 65 名) に群分けを行った。群分けには、25 item Hikikomori Questionnaire (HQ-25; Teo et al., 2018) を使用した。Teo et al. (2018) のカットオフ基準に基づき、43 点以上の者を「ひきこもり群」、43 点未満の者を「一般群」とした。そのうち、ひきこもり群は 44 名であった。

第二に、群分けの際に協力を得られた 36 名 ( $M = 19.94$ , 女性 25 名) に、半構造化面接を実施した。そのうち、ひきこもり群は 14 名であった。

### 質問項目

面接では、自身が普通と思われるような語りから外れていると感じた経験を尋ねた (McLean et al., 2017)。追質問では、他人が期待する普通の語りの内容、また、普通の語りを意識するようになった過程等を尋ねた (Hihara et al., 2020)。

### 評定項目

面接で得られた語りを逸脱の有無 (0-2 点)、MN の精緻化 (1-3 点)、AN の精緻化 (1-4 点) の 3 項目で評定した。項目は、MN および AN に関する評定マニュアル日本語版 (Hihara et al., 2020) と McLean et al. (2017) の項目を参考に作成した。

## 結果

第一に、MN からの逸脱の有無の比率をひきこもり群と一般群で比較したところ、10%水準で比率の偏りが見られた ( $\chi^2(2) = 4.779, p = .092, V = .36$ )。残差分析を行ったところ、逸脱を報告した者 (2 点) はひきこもり群に多く (調整済み標

準化残差は 1.97)、一般群に少なかった (調整済み標準化残差は-1.97) ことから、仮説 1 は支持された。

第二に、MN、AN を精緻化している程度を、ひきこもり群と一般群で比較したところ、有意な得点差が見られた (Table 1)。ひきこもり群は、MN をより明確にするとともに、精緻な AN を構築しており、仮説 2、3 は支持された。

また、ひきこもり群における逸脱している MN の内容を検討したところ、(1) 「小・中・高・大・就職と滞りなく進んでいく」といった標準的なライフコースに関する内容が約半数に見られた (36 名中 19 名)。これはひきこもり群と一般群の双方に見られる語りであった。(2) ひきこもり群 2 名に「家族で食事する、旅行する」といった、家族の仲の良さに関する内容が見られた。(3) ひきこもり群 2 名に「男、女らしさ」といった、性別に関する内容が見られた。

## 考察

本研究の結果は、日本におけるひきこもりの若者が、標準的なライフコース、家族の仲の良さ、性別といった MN から逸脱し、詳細に理解していることを示した。また、ひきこもりの若者は、これらの MN に制約を受けつつも、AN という形で、主体性を見出そうとする語りを構築していた。これは、日本の MN の枠組みにおける交渉プロセスの一端を示した。

今後は MN の枠組みにおける交渉の内容を明らかにするため、本研究で得られた、ひきこもり者が逸脱している MN の内容を手掛かりに、より詳細な検討を行う。具体的には、日本の若者のひきこもりが逸脱した MN、それに対応して構築された AN について、質的分析を行う。

Table 1

	一般群		ひきこもり群		t 値	df	d
	M	SD	M	SD			
MNの精緻化 (1-3)	2.18	0.50	2.64	0.50	0.46*	34	0.90
ANの精緻化 (1-4)	2.27	1.12	3.07	1.14	2.07*	34	0.69

注) M は得点の平均値、SD は標準偏差、df は自由度、d は効果量  
\*  $p < .05$

(指導教員：杉村 和美)